日本語版改訂被害者用迷惑な接近行動尺度 (UPBI-R-V-J) の開発¹

小林 大介² 東北大学

Development of a Japanese version of the Unwanted Pursuit Behavior Inventory-Revised for Victimization

Daisuke Kobayashi (Tohoku University)

The purpose of this research was to develop a Japanese version of the Unwanted Pursuit Behavior Inventory-Revised for Victimization (UPBI-R-V-J), which is a measure of unwanted pursuit behavior, and examine the reliability and validity of the UPBI-R-V-J. Unwanted pursuit behavior is defined as unwanted actions by former relationship partners, including stalking. The questionnaire survey was given to 133 university students, junior college students, and vocational college students (24 males and 109 females). The results revealed that the UPBI-R-V-J consisted of instances of mild damage and severe damage, and it had adequate reliability coefficients ($\alpha = .83$ and $.74$, respectively). Furthermore, each subscale was positively correlated with attachment anxiety associated with the former partner and was also positively correlated with the violence from former intimate partners that occurred during the romantic relationship; thus, the criterion-related validity of the UPBI-R-V-J was confirmed. Therefore, the UPBI-R-V-J was deemed to be reliable and valid. Finally limitations of the research and future directions are discussed.

Key words: unwanted pursuit behavior, stalking, former partner, attachment anxiety, intimate partner violence.

The Japanese Journal of Psychology

2020, Vol. 91, No. 1, pp. 44–53

J-STAGE Advanced published date: January 20, 2020, <https://doi.org/10.4992/jjpsy.91.18240>

警察庁 (2018) が発表した平成 29 年中のストーカー事案等への相談件数は、23,079 件であり、ストーカー規制法施行以後最多の相談件数を記録している。ストーキングによる被害は、被害者に対して、不安や恐怖、怒り等の感情の喚起、それらに伴う電話番号やメールアドレスの変更、転居・転職・転校等深刻な生活上の支障、PTSD 症状や精神的健康の低下をもたらし、時として、傷害・殺人事件に至る深刻な社会問題であ

る。警察庁の報告によると、ストーキングの被害者の 88.3% が女性とされ、年齢層は 10 歳代から 30 歳代で全体の約 70% を占める。特に被害率が高い年齢層は 20 歳代で全体の 35.5% であり、大学生の約 17% がストーキングの被害を経験しているという報告 (京都府警察, 2017) から、学生を含む若年層において多く見られる問題とされる。

このような実態の一方で、本邦におけるストーキング被害者の支援を目的とした研究は非常に少ないのが現状である。城間・松井・島田 (2017) は、海外におけるストーキングに関する文献のレビューを通し、本邦におけるストーキング研究の課題として、第 1 に、被害者がストーキングと感じる被害が、必ずしもストーカー規制法で規制されているとは限らず、被害を測定する上でも混乱が生じること、第 2 に、元交際相手からのストーキングの件数が全体のストーキング被害のおよそ半分を占める (警察庁, 2018) にもかかわらず、元交際相手という関係性は検討されてこなかったこと、第 3 に、ストーキング被害者が受ける心理的・

Correspondence concerning this article should be sent to: Daisuke Kobayashi, Graduate School of Education, Tohoku University, Kawauchi, Aoba-ku, Sendai 980-8576, Japan. (E-mail: dkobayashi1922@gmail.com)

¹ 本研究の一部は、日本家族心理学会第 36 回大会 (2019) に於いて発表された。

² 尺度翻訳にご快諾いただきました Professor Langhinrichsen-Rohling (University of South Alabama), 研究を行うにあたりご指導ご助言をいただいた若島 孔文准教授 (東北大学), 荒井 崇史准教授 (東北大学), 安保 英勇准教授 (東北大学), 調査実施にご協力いただいた先生方に感謝申し上げます。

経済的な影響についての検討が行われていないことの3点を掲げている。このような課題を踏まえ、本研究では、本邦におけるストーキング被害者の支援に向けた研究を行うため、(a) ストーカー規制法に限定されない行動も測定すること、(b) 元交際相手からのストーキングに焦点を当てること、(c) 被害に伴う心理的な影響を検討できることの3点を条件に掲げ、海外で使用されているストーキング尺度に着目した。

海外において、元交際相手からのストーキングに関する研究は、ストーキングを測定する尺度の開発からスタートしている (Dutton & Winstead, 2006)。しかし、ストーキングの測定は一般的な行動と深刻な行動の境界が極めて曖昧であり (Cupach & Spitzberg, 1998)、初期のストーキング研究においてはこのような境界を踏まえて、どのようにストーキングを測定するかという点に焦点が当てられてきた (Cupach & Spitzberg, 1998; Dutton & Winstead, 2006; Sheridan, Blaauw, & Davies, 2003)。例えば、Cupach & Spitzberg (1998) は、交際関係の解消後に行われる行動が少し侵害的なものから、かなり侵襲的なものへと徐々にエスカレーションするリスクがあることを指摘し、これらの行動を網羅的に測定する必要性があると報告している。このような視点に基づき作成された尺度の多くは、比較的軽度とされる行動から深刻な行動までを連続体として測定し、あわせて持続性、加害者の意図 (加害者用尺度)、被害者の反応 (被害者用尺度) を同時測定する内容となっている (Sheridan et al., 2003)。また、このような点から、名称としても、法的な意味合いの強い「ストーキング」よりも、ストーキングを含む、元交際相手から行われる被害者が望まない行動全般を指す、「(元交際相手による) 迷惑な接近行動」(Unwanted Pursuit Behavior: 以下、UPB とする) という名称が主に使用されている (Cupach, Spitzberg, Bolingbroke, & Tellitocci, 2011; De Smet, Loeys, & Buysse, 2012; Dutton & Winstead, 2006; Langhinrichsen-Rohling, Palarea, Cohen, & Rohling, 2000)。本研究では、これらの UPB を測定する尺度の中でも、恋愛関係解消後に元交際相手から行われる行動を「軽度」なものから「重度」なものまで網羅的に確認できること、各行動に伴う被害者の感情を測定できるという点から、Unwanted Pursuit Behavior Inventory (以下、UPBI とする) に着目した。UPBI は Palarea & Langhinrichsen-Rohling (1998) によって、先行研究や調査のレビューとロサンゼルス警察の協力のもと、UPB の発生を把握するために作成された尺度であり (参考として、Langhinrichsen-Rohling et al., 2000)、「軽度被害」13 項目と「重度被害」13 項目の全 26 項目からなる。また、恋愛関係の解消を経験した 18 歳以上の成人を対象としている。UPBI は加害者用尺度と被害者用尺度が存在するが、ストーキング被害者の支援ツール作成をめざす本研究では、被害者用尺度につい

てのみ報告する。尺度は各項目ごとに経験の有無を尋ね、経験があった場合、「1 = 日に何度も」から「5 = 1 ヶ月にあるかどうか」という頻度項目と、その行動への対応の有無 (2 件法)、その行動が回答者にとってポジティブかネガティブか (2 件法) という構成となっている (参考として、Langhinrichsen-Rohling & Palarea, 2006)。近年では、Langhinrichsen-Rohling (2015) が、改訂版の UPBI である Unwanted Pursuit Behavior Inventory-Revised (以下、UPBI-R とする) を作成している。原版である UPBI との違いは、「武器を使ってあなたを脅迫をした」のようないくつかの行動が、「あなたやあなたの友人、家族、所有物に対して、明白な (傷つけてやる、殺してやる、またはあなたに関する有害な情報を公表してやるといった) 脅しをかけた」のような形に統合されたことにより、項目数が 26 項目から「軽度被害」10 項目と「重度被害」8 項目の全 18 項目に減少していることと、頻度の測定が 5 件法から 2 件法 (「1 = 1 回、2 = 2 回以上」) になったこと、行動に対する被害者の評価がポジティブかネガティブかの 2 件法から恐怖度を測定する 4 件法の尺度となったことがあげられる。これらの特徴から、UPBI-R は UPBI と比較し、より行動に伴う恐怖度という感情の側面を重視する内容となっている。このような側面を踏まえ、本研究では、前述した 3 点の課題に対応するため、この UPBI-R の被害者版である Unwanted Pursuit Behavior Inventory-Revised for Victimization (以下、UPBI-R-V とする) を翻訳し、被害者の実態を正確に把握するための研究用のツールとして本邦で運用するために、信頼性と妥当性の検討を行うことを目的とする。以下に、UPBI-R-V との関連が予想される概念と、その理由を述べる。

まず、性差について、先述したように警察によって認知されたストーキング被害については、女性の方が被害を受けていることが報告されている (警察庁, 2018)。その一方で、UPB のようなストーカー的な行動に関しては、原版の UPBI を使用した研究を含め、被害に性差が見られないことがいくつかの研究で報告されている (Dutton & Winstead, 2006; Langhinrichsen-Rohling et al., 2000)。小早川 (2008) は、自身の運営する相談機関を利用するストーキング被害者に男女の差はないと指摘しており、警察のような公的な機関が認知する件数と実際のストーキングの実態には隔たりが生じていることが考えられる。このような理由としては、「男性がストーキングの被害に遭うことはない」という社会的な偏見の存在により、男性は被害を訴えることに抵抗感を持つこと (池田, 2002) と、男性が女性と比較して異性からの暴力被害に伴う精神的ダメージを受けにくく (上野・松並・青野, 2018)、警察への通報につながりにくいことの両面が考えられる。このような点を踏まえ、本研究で測定する UPB

の被害に関しても、性差が確認できないことが予想される。

また、恋愛関係において、別れの主導権をどちらが持っていたかも重要である。Davis, Shaver, & Vernon (2003) は、相手から別れを切り出された場合、自分から別れを切り出した場合と比較して苦痛を生じやすく、次の恋愛への移行に困難が伴うことや、相手に対して怒りや敵意のような感情を抱きやすいことを明らかにしている。この点からも、恋愛関係の解消において、自分が主導権を握っていた場合、相手が主導権を握っている場合よりも UPB の被害を経験しやすいことが予測される。

続いて、UPB を促進する主要なリスクファクターの 1 つに愛着スタイルの理論における愛着不安があげられる。愛着スタイルとは、Hazan & Shaver (1987) が Bowlby (1969–1980) の愛着理論を成人の恋愛に取り入れた概念であり、乳幼児期に養育者との愛着関係によって形成された信念や認知傾向（これを内的作業モデルと呼ぶ）が、その後の対人関係のあり方、他者との関わり方にも影響をもたらすという理論である。Bartholomew & Horowitz (1991) は、この愛着スタイルを自己モデルと他者モデルの側面から分類し、安定型、拒絶型、とらわれ型、恐れ型からなる 2 次元 4 分類のモデルを提唱した。Brennan, Clark, & Shaver (1998) は、この 2 次元 4 分類に基づいて作成された複数の尺度の項目を因子分析することによって統合を試み、その結果、各尺度の項目が不安と回避の 2 次元に集約されることを明らかにした。不安は、自分に対するネガティブさを表し、他者に見捨てられることに対する不安の程度を反映しており、回避は、他者に対するネガティブさのことを表し、他者との親密さに心地よさを感じない程度を反映しているとされる。

このような点から、UPB に関する研究においては、愛着スタイルの中でも特に行為者側の愛着不安が多く扱われており、行為者側の愛着不安の高さが元交際相手に対する UPB を促進するという一貫した結果が示されている (Davis et al., 2003; Dutton & Winstead, 2006; Langhinrichsen-Rohling et al., 2000; Wigman, Graham-Kevan, & Archer, 2008)。本研究では、UPB の被害者を対象とした研究であるため、被害者側から見た、元交際相手の愛着不安を測定する。Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall (1978) が行ったストレンジ・シチュエーション法に代表されるように、愛着の個人差を強く反映する行動は直接観察可能である。このような点から、被害者が認知する元交際相手の愛着不安の程度を UPBI-R-V の基準関連妥当性の指標の 1 つとして用いる。

最後に、元交際相手からのストーキング被害は恋愛関係時の暴力被害との関連が指摘されている。Logan,

Shannon, & Cole (2007) は、これまで交際相手による DV によって保護された経験を持つ女性の中で、その交際相手からストーキングの被害にあった人が 53% に上ったことを示し、さらに、ストーキングの被害を経験した人はそうでない人と比較して交際時に深刻な脅迫や性的な固執、暴力の被害を多く経験していることを報告している。また、Katz & Rich (2015) は、恋愛関係時の身体的・性的暴力の被害が恋愛関係解消後の接近・監視・脅迫のような深刻なストーキング被害を予測することを示している。UPB においても、恋愛関係時の精神的な暴力と身体的な暴力の経験がそれぞれ UPB の被害に関連することが示されている (Langhinrichsen-Rohling et al., 2000; Wigman et al., 2008)。本邦においても、島田 (2016) が、恋愛関係時の身体的暴力の被害と細かい監視が恋愛関係解消後のストーキング被害のリスクを 2 倍から 3 倍に高めると報告している。

以上の点を踏まえ、本研究では、最初に本邦におけるストーキング被害者の支援に関する研究の課題として、第 1 に、ストーカー規制法に該当する行動以外の行動について検討が不十分であること、第 2 に被害のおよそ半分を占める、元交際相手からのストーキングが検討されていないこと、第 3 に、ストーキング被害者に関する調査の多くが、被害に伴う苦痛を測定していないことの 3 点を示した。そして、この 3 つの課題の解決のために、(a) 法的に規制されていないストーカー的な行動を含む行動を測定すること、(b) 元交際相手からのストーキングを対象とすること、(c) 被害に伴う心理的影響にも焦点を当てることの 3 点を掲げた。そこで、これらの条件をクリアする UPB 被害の測定尺度である UPBI-R-V を翻訳し、信頼性と、性差、別れの主導権、元交際相手の愛着不安、恋愛関係時の暴力被害という変数によって、UPBI-R-V の妥当性を検証することを目的とする。

方 法

項目の邦訳

稲田 (2015) による、「尺度翻訳に関する基本指針」に沿って尺度邦訳を行った。手続きは以下の通りであった。まず、UPBI-R-V の原版著者である Prof. Langhinrichsen-Rohling から日本語版作成の許可を得て、翻訳会社による順翻訳を行った。その後、項目について著者と翻訳会社で日本語表現の調整を行い、ここで作成された順翻訳版の逆翻訳を翻訳会社が行った。逆翻訳された尺度は、原版と日本語版の間に生じた訳の乖離を検討するために UPBI-R-V の原著者に送られ、原著者からいくつかの項目やニュアンスに関して修正指示を受けたため、その指示に従って邦訳を修正し、再度翻訳会社による逆翻訳を行った。この手続

きを2回行ったところ、原著者より問題がないと判断されたため、日本語版の項目を確定した。また、教示および選択肢についても問題がないと判断された。完成した日本語版尺度は原版と同じ「軽度被害」10項目、「重度被害」8項目の計18項目で構成される。この18項目を暫定的な日本語版 Unwanted Pursuit Behavior Inventory-Revised for victimization（以下、UPBI-R-V-Jとする）とした。UPBI-R-V-Jは、各行動の経験の有無を「1=ある」、「2=ない」の2件法で確認し、「1=ある」に○を記入した場合、その行動の経験頻度を「1=1回」、「2=2回以上」の2件法で回答を求め、続けて、その行動による恐怖度を「0=全くない」から「3=とても強く」の4件法で確認する構成となっている。

調査対象者

大学生と短期大学生、専門学生を対象とした質問紙調査を実施した。回答者は、417名（男性72名）であったが、交際後の別れを経験したことがないと回答した者163名（男性31名）と別れからの経過期間が5年を超えている者、交際期間が1ヵ月に満たない者、回答に不備があった者合わせて、121名（男性17名）を分析から除き、最終的に女性109名、男性24名の合計133名（平均年齢19.67歳、 $SD = 1.39$ ）を分析の対象とした。調査時期は2018年12月から2019年1月であった。

調査内容

フェイスシート 年齢、性別、別れの経験の有無について回答を求めた。別れの経験があった場合は、交際関係を解消した後回答者が望まない形で関わってきた人の有無について回答を求め、いる場合はその人物、複数人いる場合は、交際関係解消後の関わりについて、最も不快に感じた人物、いない場合は直近の元交際相手をそれぞれAさんとして連想してもらった。その後、Aさんについて、別れてからの期間、交際期間、別れの主導権について回答を求めた。

UPB被害の測定尺度 邦訳したUPBI-R-V-J全18項目を用いた。本研究においては、基準関連妥当性の検討を行うため、行動の有無において「2=ない」に回答した場合は「0」とし、行動の頻度において「1=1回」と回答した場合は「1」、「2=2回以上」と回答した場合は「2」として、「0=ない」から「2=2回以上」の3件法でUPB経験の合計得点を算出する。そのため、合計得点が高いほど、UPBを経験していると評価される。また、本研究では、本邦独自のUPBの特徴も捉えるため、項目内に該当する行動が無い場合に自由記述で行動を書き加えられる欄を設け、その行動の頻度を「1=1回」、「2=2回以上」の2件法、恐怖度を「0=全くない」から「3=とても強く」の4件法で回答できるような作りとした。UPBI-R-V-Jに

回答後、1つでも「1=ある」に○を付けた場合、または、自由記述で行動を書き加えていた場合、その行動の現在の継続の有無を尋ね、その行動を通しての元交際相手に対する現在の恐怖感を「1=全く感じない」から「7=とても強く感じる」の7件法で評定を求めた。加えて、現在はその行動が継続していない場合、その行動がなくなった理由について分かる範囲で自由記述による回答を求めた。

元交際相手の愛着不安の測定尺度 中尾・加藤（2004）が作成した一般他者版の Experiences in Close Relationships Inventory（ECR）を中尾（2010）が他者評定用に教示と項目の一部を変更したものの中で、愛着不安に該当する項目18項目を使用した。なお、中尾（2010）において教示されている、「あなたの隣に座っている○○さんについてお尋ねします」の部分に関しては、本研究では、「元交際相手であるAさんについてお尋ねします」とし、『「あなた自身が隣にいる相手に対して感じたまま」を答えてください』の部分については、『「あなた自身がAさんに対して感じたまま」を答えてください」と教示した。なお、項目内の「○○さん」は全て「Aさん」に変更している。回答者には、Aさんについて想起してもらい、「1=全く当てはまらない」から「7=非常によく当てはまる」の7件法で評定を求めた。合計得点が高いほど、元交際相手の愛着不安が高いと評価される。そのため、UPBI-R-V-Jとは、正の相関が見られることが予想される。

恋愛関係時における暴力被害の測定尺度 片岡（2005）が作成した Violence Against Women Screen（以下、VAWSとする）7項目を用いた。尺度の内容は、身体的暴力2項目と非身体的暴力5項目で構成されているが、片岡（2005）は、構成概念の妥当性検討から、一次元の因子構造であると示している。そのため、合計得点が高いほど、交際相手による暴力の被害が高いと評価される。なお、本尺度は、本来恋愛関係にある相手からの暴力の測定に用いられるが、本研究は元交際相手からの暴力を測定するため、元々の教示である、「過去1年間のあなたとパートナーとの関係に関する質問です」の部分について、補足として、「元交際相手と別れる前の1年間を想定してください。1年に満たない場合は交際している期間を想定してお答えください」と加えた。回答者には、元交際相手と別れる前の1年間（1年に満たない場合は交際期間）を思い出してもらい、各項目の行動をどの程度経験したかを「1=まったくない」から「3=よくある」の3件法で評定を求めた。UPBI-R-V-Jとは、正の相関が見られることが予想される。

倫理的配慮

調査に際し、質問紙の表紙には、ストーカー被害やデートDVの具体的経験に関する内容を含んでいるこ

と、本研究への協力は強制ではないこと、思い出したくない場合や考えたくない場合、気分を害し、それが長引いた場合等には、回答を途中でやめること、調査は匿名であり、個人の情報が外部に流出することがないことを明記し、これを調査時に口頭で教示した。また、侵襲的な内容を含むページの上部には、具体的な被害内容を問うという教示と、表紙と同様、思い出したくない場合や考えたくない場合、気分を害し、それが長引いた場合等には、回答を途中でやめることを明記した。質問紙の表紙と切り取り可能な最終ページには、著者の連絡先を記載し、もし回答協力後に何らかの心理的苦痛が生じた場合には、著者に連絡を取るようにも周知した。なお本研究は、東北大学大学院教育学研究科倫理委員会より実施の承認を得ている（承認 ID: 18-1-033）。

結 果

調査対象者の特性

調査対象者の特性を見ると、対象となる交際相手との別れからの経過期間については、平均が 24.76 ヶ月 ($n = 133$, $SD = 17.08$)、最も長くて 60 ヶ月、最も短くて 2 週間であった。対象となる交際相手との交際期間については、平均が 14.40 ヶ月 ($n = 133$, $SD = 14.96$)、最も長くて 78 ヶ月、最も短くて 1 ヶ月であった。続けて、別れの主導権については、回答者 133 名中、92 名 (69.2%) が自分から別れを切り出しており、41 名 (30.8%) が相手から別れを切り出されていた。

UPBI-R-V-J の項目精選と信頼性検討

UPBI-R-V-J の項目の度数分布 18 項目の回答のうち「1 回」と「2 回以上」の回答を合わせると、最も多かったのは、「あなたに自分から離れないでくれ、別れないでくれと懇願してきた」で 133 名中 43 名 (32.3%)、次に「あなたが望んでいない直接会っての会話に付き合わせた」で 133 名中 29 名 (21.8%) であった。続いて、「重度被害」の経験率を見ると、「あなたのせいで自分のことを傷つける、自殺すると脅した」に 133 名中 17 名 (12.8%)、続けて、「強制的な性的接触にあなたを付き合わせた」に 133 名中 11 名 (8.3%) が回答した。他の「重度被害」に該当する行動についても数人が経験したと回答していた。また、全ての項目のうち、何かしらの UPB を経験したと回答した者は、133 名中 68 名 (51.1%) だった。また、経験した UPB に恐怖が伴ったと 1 つでも回答した者は 133 名中 51 名で全体の 38.3% であった。現在も被害が継続していると回答した者は、68 名中 9 名であった。加えて、何かしらの UPB を経験した 68 名のうち、UPB を通して、元交際相手に現在抱えている恐怖感の平均値は 2.51 ($SD = 2.00$) で、得点範囲は 1 から 7 であっ

た。本研究においては、項目 12 の「あなたの物を盗んだ(郵便物・メールを含む)」の経験者が見られなかった。そのため、この 1 項目を以降の分析から除外した。また、全ての項目において、約 70% 以上が「ない」と回答しているため、歪んだ分布となっている。しかし、これは、DV やストーキング等暴力に関する研究においては、共通している分布となっているため、分布の特徴として捉え、この点からの項目の除外は行わなかった。

I-T (項目-全体) 相関分析と信頼性の検討 続いて、I-T 相関分析を用いて、質問項目の精選を行った。各項目の得点と総合得点の相関係数を算出した結果、相関係数が .20 以下の項目はなかった。相関係数の範囲は .25 から .73 であった。これらの 17 項目を用いて信頼性係数を算出したところ、 $\alpha = .88$ であった。最も相関係数が低かった項目 (項目 15) を除いたとしても $\alpha = .87$ と信頼性係数の低下が見られたこと、尺度の使用可能性から、項目の除外が適切でないと判断し、項目 15 はそのまま用いることとした。以上の結果より、UPBI-R-V-J は 17 項目で構成すると最適解になり、十分な信頼性があることが示された。

UPBI-R-V-J の妥当性の検討

UPBI-R-V-J の分布 UPBI-R-V-J の 17 項目について、「0 = ない」、「1 = 1 回」、「2 = 2 回以上」とした。したがって、UPBI-R-V-J は得点が高いほど、UPB の経験が多いことを示している。分布は左に歪んでおり、0 点、つまり全ての項目が「0 = ない」という者が、48.9% を占めていた。平均値は 3.24 ($SD = 5.22$) であり、中央値は 1 点であった。また、得点範囲は 0 点から 25 点であった。

UPBI-R-V-J の構成概念妥当性 UPBI-R-V-J の構成概念妥当性を見るために、先行研究に準じて、「軽度被害」10 項目と、「重度被害」7 項目に分類を行い、それぞれ I-T 相関分析を行った。各項目の得点と、総合得点の相関係数を算出した結果、「軽度被害」・「重度被害」それぞれにおいて、相関係数が .20 以下の項目はなかった。相関係数の範囲は、「軽度被害」は .40 から .74、「重度被害」は .32 から .80 であった。続いて、「軽度被害」10 項目、「重度被害」7 項目の信頼性係数を算出したところ、「軽度被害」が $\alpha = .83$ 、「重度被害」が $\alpha = .74$ と、それぞれ十分な信頼性が得られた。続いて、「軽度被害」、「重度被害」それぞれの項目ごとの恐怖度の平均値を算出した。各項目の経験人数と恐怖度の基礎統計を Table 1 に示す。各行動の経験人数にばらつきがあり、解釈には慎重になる必要があるが、「軽度被害」の項目 8 の恐怖度の平均値が 2.00 ($n = 11$, $SD = 1.00$) であり、「重度被害」の項目 13 の恐怖度の平均値 2.00 ($n = 6$, $SD = 0.89$) と同じ数値を示し、項目 17 の平均値 1.91 ($n = 11$, $SD = 1.14$) を上回っ

Table 1
「軽度被害」と「重度被害」の項目別の経験人数と恐怖度の基礎統計 ($n = 133$)

項目	経験人数 (<i>n</i>)	恐怖度			
		<i>Max</i>	<i>mini</i>	<i>Mean</i>	<i>SD</i>
軽度被害 (<i>n</i> = 133)					
(Max = 19, mini = 0, Mean = 2.62, SD = 3.90, α = .83)					
1. あなたに自分から離れないでくれ、別れないでくれと懇願してきた。	43	3	0	0.93	0.88
2. 電話にあなたが望んでいないメッセージを残した、またはあなたが出たらすぐに切れる電話をかけてきた。	13	3	0	1.46	0.97
3. あなたが望んでいない電話の会話に付き合わせた。	24	3	0	1.00	0.88
4. あなたが望んでいない直接会っての会話に付き合わせた。	29	3	0	1.28	1.00
5. あなたが望んでいないものをくれた (例:手紙・プレゼント)。	14	3	0	1.24	1.12
6. あなたの友人や家族からあなたの情報を得ようとした。	28	3	0	1.57	1.10
7. あなたが普段使う道で“思いがけなく”出会ったり、あなたが普段いる場所に現れたりした。	13	3	0	1.62	1.26
8. あなたの家に予告なしに訪れた。	11	3	0	2.00	1.00
9. あなたの学校・職場・その他のほかの公共の場所に予告なしに現れた。	11	3	0	1.82	1.08
10. もう一度親密な関係をやり直そうとあなたを強硬に説得しようとした。	22	3	0	1.55	1.10
重度被害 (<i>n</i> = 133)					
(Max = 9, mini = 0, Mean = 0.62, SD = 1.60, α = .74)					
11. あなたの後ろをつけてきた。	3	3	3	3.00	0.00
13. あなたやあなたの友人、家族、所有物に対して、明白ではない、ほのめかすような脅しをかけてきた。	6	3	1	2.00	0.89
14. あなたやあなたの友人、家族、所有物に対して、明白な（傷つけてやる、殺してやる、またはあなたに関する有害な情報を公表してやるといった）脅しをかけた。	6	3	1	2.33	0.82
15. あなたやあなたの友人、家族、親しい人、パートナーおよび所有物に実際に危害を加えた。	3	3	3	3.00	0.00
16. あなたのせいで自分のことを傷つける、自殺すると脅した。	17	3	0	2.12	0.86
17. 強制的な性的接触にあなたを付き合わせた。	11	3	0	1.91	1.14
18. あなたの意志に反してあなたを拉致、あるいは拘束した。	5	3	1	2.20	0.84

注) 12. 「あなたの物を盗んだ (郵便物・メールを含む)」は経験者がいなかったため、以降の分析から除外した。

ていた。この点からも、「軽度被害」と「重度被害」を恐怖度の指標で分類する点については課題が残った。

UPBI-R-V-J の基準関連妥当性 UPBI-R-V-J の基準関連妥当性を求めるために、性差と、別れの主導権による UPB の経験率の差異の検討と、元交際相手の愛着不安と恋愛関係時の暴力被害との併存的妥当性の検討を行った。元交際相手の愛着不安 ($Max = 114$, $mini = 18$, $Mean = 39.79$, $SD = 21.51$, $\alpha = .94$) と、恋愛関係時の暴力被害 ($Max = 20$, $mini = 7$, $Mean = 8.74$, $SD = 2.44$, $\alpha = .82$) については、十分な信頼性が求められたことから、それらの項目の合計得点をもって得点の算出を行った。

まず、性差について、男性 24 名と女性 109 名を対象に Mann-Whitney の U 検定を用いて、2 群間の「UPB 全体被害」の合計得点、「軽度被害」の合計得点、「重度被害」の合計得点の比較を行った (Table 2)。その結果、「UPB 被害全体」、「軽度被害」、「重度被害」それぞれにおいて、男女間で有意な差は見られなかった ($U = 1296.0$, ns ; $U = 1282.5$, ns ; $U = 1259.0$, ns)。次に、別れの主導権について、自分から別れを切り出したと回答した 92 名と、相手から別れを切り出されたと回答した 41 名を対象に、Mann-Whitney の U 検定を用いて、2 群間の「UPB 全体被害」の合計得点、「軽度被害」の合計得点、「重度被害」の合計得点の比較を行った (Table 3)。その結果、「UPB 全体被害」、「軽

Table 2
性差による UPB 被害の経験率の差 ($n = 133$)

	性差				統計量
	男性		女性		
	<i>n</i> = 24		<i>n</i> = 109		
	<i>Mean</i>	<i>SD</i>	<i>Mean</i>	<i>SD</i>	
UPB 全体被害合計	4.71	7.77	2.92	4.45	<i>U</i> = 1296.0, <i>ns</i>
軽度被害合計	3.50	5.16	2.43	3.56	<i>U</i> = 1282.5, <i>ns</i>
重度被害合計	1.21	2.81	0.49	1.16	<i>U</i> = 1259.0, <i>ns</i>

Table 3
別れの主導権による UPB 被害の経験率の差 ($n = 133$)

	別れの主導権				統計量
	自分		相手		
	<i>n</i> = 92		<i>n</i> = 41		
	<i>Mean</i>	<i>SD</i>	<i>Mean</i>	<i>SD</i>	
UPB 全体被害合計	4.27	5.89	0.93	1.72	<i>U</i> = 1133.5 ***
軽度被害合計	3.45	4.34	0.78	1.46	<i>U</i> = 1109.0 ***
重度被害合計	0.83	1.86	0.15	0.53	<i>U</i> = 1543.5 *

*** $p < .001$, * $p < .05$

Table 4
基準関連妥当性検討のために用いた変数間の相関 ($n = 133$)

	2	3	4	5
1 UPB 全体被害合計	.996 ***	.710 ***	.556 ***	.484 ***
2 軽度被害合計		.666 ***	.551 ***	.469 ***
3 重度被害合計			.448 ***	.472 ***
4 元交際相手の愛着不安				.581 ***
5 恋愛関係時の暴力被害				

*** $p < .001$

度被害」,「重度被害」の全てにおいて,自分から別れを切り出した者の方が,相手から別れを切り出した者より有意に多く,被害を経験していることが分かった ($U = 1133.5, p < .001$; $U = 1109.0, p < .001$; $U = 1543.5, p < .05$)。

続いて,併存的妥当性を求めるため,UPBI-R-V-Jの「UPB 全体被害」の合計得点,「軽度被害」の合計得点,「重度被害」の合計得点と,元交際相手の愛着不安の合計得点,恋愛関係時の暴力被害の合計得点それぞれの相関係数を算出した (Table 4)。まず,「UPB 全体被害」の合計得点と元交際相手の愛着不安の合計得点との相関係数は $\rho = .556$ であり,中程度の正の相関が見られた ($p < .001$)。また,「UPB 全体被害」の合計得点と恋愛関係時の暴力被害の合計得点との相関係数は $\rho = .484$ であり,こちらも中程度の正の相関が見られた ($p < .001$)。「軽度被害」の合計得点と元交際相手の愛着不安の合計得点との相関係数は $\rho = .551$

であり,中程度の正の相関が見られた ($p < .001$)。また,「軽度被害」の合計得点と恋愛関係時の暴力被害の合計得点との相関係数は $\rho = .469$ であり,こちらも中程度の正の相関が見られた ($p < .001$)。「重度被害」の合計得点と元交際相手の愛着不安の合計得点との相関係数は $\rho = .448$ であり,中程度の正の相関が見られた ($p < .001$)。また,「重度被害」の合計得点と恋愛関係時の暴力被害の合計得点との相関係数は $\rho = .472$ であり,こちらも中程度の正の相関が見られた ($p < .001$)。以上の分析をもって UPBI-R-V-J の基準関連妥当性は確認されたといえる。また,先行研究で述べられている被害の連続性を示すため,「軽度被害」の合計得点と「重度被害」の合計得点の相関係数を算出した結果, $\rho = .666$ と,中程度の正の相関が見られた。

考 察

項目精選の結果,UPBI-R-V-J は 17 項目で構成され

た。UPBI-R-V-J の信頼性係数は $\alpha = .88$ であり、内的整合性の高い尺度であるといえる。項目に関しても、「あなたのものを盗んだ（郵便物・メールを含む）」を除く、全項目にそれぞれ経験者が見られた。その一方で、「あなたの後ろをつけてきた」や「あなたやあなたの友人、家族、親しい人、パートナーおよび所有物に実際に危害を加えた」のような行動の I-T 相関係数は低かった。項目の除外も検討したが、幅広い被害を捉える必要性と、今後の尺度の使用可能性を考慮し、除外せずに採用した。また、UPBI-R-V-J の特徴は、法的に規制されていない行動を含んでいることである。そこで、UPB の経験率を見ると、133 名中 68 名 (51.1%) が何かしらの UPB を経験しており、51 名 (38.3%) が恐怖を伴う UPB を経験していた。これは、京都府警察 (2017) が報告している学生のストーキングの経験率である約 17% と比較しても高い数値となっている。この点からも、UPBI-R-V-J は法的には規制されていないストーカー的な行動を含んでいるといえる。

UPBI-R-V-J の構成概念妥当性を検討するために、本研究では、先行研究に準じて、比較的軽度とされる項目を集めた「軽度被害」10 項目と、危険とされる項目を集めた「重度被害」7 項目に分類を行い、それぞれ I-T 相関係数を算出した。その結果、「軽度被害」、「重度被害」それぞれにおいて、相関係数が特に低い項目はなかった。また、信頼性係数に関しても「軽度被害」が $\alpha = .83$ 、「重度被害」が $\alpha = .74$ と十分な値を示した。加えて、恐怖度の平均値と標準偏差を算出し、記述統計的に平均値を比較したところ、「軽度被害」の 1 項目である「あなたの家に予告なしに訪れた」が平均値 2.00 ($n = 11$, $SD = 1.00$) と他の「軽度被害」と比較して、記述統計的に高い値を示した。その一方で、「重度被害」内の「強制的な性的接触にあなたを付き合わせた」は、平均値が 1.91 ($n = 11$, $SD = 1.14$) と、「重度被害」内の項目の中で記述統計的に最も低い値を示した。UPBI-R-V は、警察の協力のもと作成された尺度であり、その性質から、「重度被害」には、脅迫や暴行、拉致・拘束のような刑事事件相当の項目が含まれている。しかし、本研究の結果を見ると、「軽度被害」であっても、「重度被害」相当の恐怖感を感じる者もいれば、「重度被害」であっても恐怖感を感じない者も確認された。このような点を踏まえると、行動の内容のみで、「軽度被害」と「重度被害」を区別するには限界があるのではないかと考えられる。そのため、被害者の正確なリスクを把握するためには、行動の内容に加え、被害者のパーソナリティや性差、行為者との関係性等、恐怖感に影響を与えると思われる要因とあわせて検討を行う等、知見を重ねていく必要があるだろう。

続いて、基準関連妥当性について考察する。まず、

性差については、原版の結果と同様男女間での差は見られなかった。その一方で、本研究においては男性の調査対象者が 24 名しかいなかったのは課題である。本研究においては、元々男性の調査対象者が少なかつたため、UPB の性差に関しては、極めて慎重な検討が必要である。今後は、より正確な結果を示すためにも男性のサンプル数を増やしていくことが課題となる。別れの主導権については、先行研究と同様に差異が確認され、別れを切り出した方がより多く UPB を経験していることが明らかとなった。

続いて、併存的妥当性は、先行研究から、UPB との関連が示されている元交際相手の愛着不安と、恋愛関係時の暴力被害との中程度の正の相関が認められたことから確認された。また、本研究では、恋愛関係時の暴力被害について、UPBI-R-V-J の基準関連妥当性の検証に用いた。その結果、恋愛関係時の暴力被害と、UPB の間に中程度の相関が示された。本邦においては、島田 (2016) が恋愛関係時の交際相手からの身体的暴力の被害と細かい監視が、恋愛関係解消後のストーキング被害を予測することを報告しているが、この報告を支持する結果となった。恋愛関係時の関係性が恋愛関係解消後の関係性に影響するという知見は、本邦においては、未だに検証が十分に行われていない領域である。本研究の結果を踏まえても、恋愛関係時の暴力被害と恋愛関係解消後の UPB は連続していると考えられるため、今後は DV とストーキングを結び研究を重ね、ストーキングの予防的な取り組みに向けた知見を増やす必要があるだろう。

以上の点を踏まえ、本研究の結果、17 項目で構成される UPBI-R-V-J は、構成概念妥当性に課題を残すものの、信頼性と基準関連妥当性を備えており、本邦における UPB を測定する上で有用なツールであると考えられる。本研究では、「軽度被害」が「重度被害」と比較的高い相関を示すことも明らかとなった。「軽度被害」と「重度被害」の関連性をより詳細に検討することで、「軽度被害」の段階で「重度被害」に発展するリスクをアセスメントするツールとしての活用の方角性も考えられるだろう。加えて、本研究で作成した UPBI-R-V-J は各行動に伴う恐怖感を測定することが可能な尺度である。今後は、被害者がどのような行為や関係性によって恐怖感を感じるかを明らかにする必要があるだろう。また、このような恐怖感に対するケアを行うような介入も明らかにしていく必要がある。例えば、Nguyen, Spitzberg, & Lee (2012) はストーキングの被害者に対して、ソーシャルサポートを提供することによって、その後の精神状態を安定させることを明らかにしている。

本研究では、UPB の被害者に対して、現実的で有効な支援を検討するため、UPB が現在継続していない理由について自由記述で回答を求めた。結果を見る

と、「無視・メールアドレスのブロック・着信拒否」が最も多く、その後、「相手に交際相手ができた」、「元交際相手との直接の話し合い」、「時間経過」、「物理的な距離」、「自分に交際相手ができた」、「友人に相談」、「警察に通報」と続いた。被害者が被害を軽度と認知している場合は、無視等の対応で落ちついているが、被害の程度が重度になるにつれて、個人での対応が困難になっている印象である。このような点からも、今後は、被害者の認知する被害の深刻度と照らし合わせた支援を考える必要もあるだろう。

また、本研究では、回答者に対し、尺度内に該当する項目がない場合に自由記述で項目を書き入れる枠を設けた。その結果、LINE や Twitter のような SNS を利用しての監視やメッセージの連投、暗に被害者に関連するような投稿を行う、のような行動が確認された。このようなインターネットを用いたストーキングの形態についても本邦の特徴を踏まえて測定できるよう尺度の改訂を重ねていく必要がある。

最後に、本研究はストーキング被害に伴う心理的な影響に焦点を当てて検討を行った。しかし、深刻なストーキング被害は時として、被害者に転居や転職、転校を余儀なくさせ、被害者は心理面だけでなく、経済的な影響も被る。これらもあわせて検討することによって、より具体的な支援の方向性が見えてくるだろう。

以上より、UPBI-R-V-J の信頼性と妥当性に関する課題の検証と今後の UPB の研究可能性に関する展望を考察した。本邦においては、ストーキング被害者の支援に関する研究は未だ進んでいないのが現状である。今後は、本尺度を用いて、恐怖度尺度の分析、本邦における被害の実態の検証を通し、より多角的な側面から UPB の研究を展開することが望まれる。

利益相反について

なお、本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

引用文献

- Ainsworth, M. D., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. (1978). *Pattern of attachment: A psychological study of strange situation*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Bartholomew, K., & Horowitz, L. M. (1991). Attachment styles among young adults: A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 226–244.
- Bowlby, J. (1969–1980). *Attachment and loss: Attachment* (Vol. 1–3). New York: Basic Books.
- Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. (1998). Self-report measurement of adult attachment: An integrative overview. In J. A. Simpson & W. S. Rholes (Eds.), *Attachment theory and close relationship* (pp. 46–76). New York: Guilford Press.
- Cupach, W. R., & Spitzberg, B. H. (1998). Obsessive relational intrusion and stalking. In B. H. Spitzberg & W. R. Cupach (Eds.), *The dark side of close relationships* (pp. 233–263). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Cupach, W. R., Spitzberg, B. H., Bolingbroke, C. M., & Tellitocci, B. S. (2011). Persistence of attempts to reconcile a terminated romantic relationship: A partial test of relational goal pursuit theory. *Communication Reports*, 24, 99–115.
- Davis, D., Shaver, P. R., & Vernon, M. L. (2003). Physical, emotional, and behavioral reactions to breaking up: The roles of gender, age, emotional involvement, and attachment style. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 29, 871–884.
- De Smet, O., Loeys, T., & Buysse, A. (2012). Post-breakup unwanted pursuit: A refined analysis of the role of romantic relationship characteristics. *Journal of Family Violence*, 27, 437–452.
- Dutton, L. B., & Winstead, B. A. (2006). Predicting unwanted pursuit: Attachment, relationship satisfaction, relationship alternatives, and break-up distress. *Journal of Social and Personal Relationships*, 23, 565–586.
- Hazan, C., & Shaver, P. (1987). Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 511–524.
- 池田 理知子 (2002). 届かない男性被害者の声——あるストーカー事件の詳細を追う—— 異文化コミュニケーション, 5, 19–32.
- 稲田 尚子 (2015). 尺度翻訳に関する基本指針 行動療法研究, 41, 117–125.
- 片岡 弥恵子 (2005). 女性に対する暴力スクリーニング尺度の開発 日本看護学会誌, 25, 51–60.
- Katz, J., & Rich, H. (2015). Partner covictimization and post-breakup stalking, pursuit, and violence: A retrospective study of college women. *Journal of Family Violence*, 30, 189–199.
- 警察庁 (2018). 平成 29 年におけるストーカー事案及び配偶者からの暴力事案等への対応状況について 警察庁 Retrieved from https://www.npa.go.jp/safetylife/seianki/stalker/H29STDV_taioujoukyou_shousai.pdf (2019 年 9 月 13 日)
- 小早川 明子 (2008). ストーカー加害者の人間関係依存からの再生を支援する——被害者の本当の安全のために—— 精神科看護, 35(10), 40–45.
- 京都府警察 (2017). ストーカー事案の実態及び現状分析 京都府警察 Retrieved from http://www.pref.kyoto.jp/fukei/anzen/seitai/tokumei/documents/dai2_1.pdf (2019 年 9 月 13 日)
- Langhinrichsen-Rohling, J. (2015). *Unwanted Pursuit Behavior Inventory-Revised* (Unpublished measure).
- Langhinrichsen-Rohling, J., & Palarea, R. E. (2006). Unwanted pursuit Behavior Inventory. In M. P. Tompson, K. C. Basile, M. F. Hertz, & D. Sitterle (Eds.), *Measuring intimate partner violence perpetration and victimization: A compendium of assessment*

- tools* (1st ed., pp. 99–100). Atlanta, GA: Centers for Disease Control and Prevention, National Center for Injury Prevention and Control.
- Langhinrichsen-Rohling, J., Palarea, R. E., Cohen, J., & Rohling, M. L. (2000). Breaking up is hard to do: Unwanted pursuit behavior following the dissolution of a romantic relationship. *Violence and Victims, 15*, 73–90.
- Logan, T. K., Shannon, L., & Cole, J. (2007). Stalking victimization in the context of intimate partner violence. *Violence and Victims, 22*, 669–683.
- 中尾 達馬 (2010). 面識があまりなくとも、他者の愛着スタイルを認識することは可能なのか？——愛着スタイル尺度における自己評定と他者評定の一致度の検討—— パーソナリティ研究, *19*, 146–156.
- 中尾 達馬・加藤 和生 (2004). 「一般他者」を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究, *5*, 19–27.
- Nguyen, L. K., Spitzberg, B. H., & Lee, C. M. (2012). Coping with obsessive relational intrusion and stalking: The role of social support and coping strategies. *Violence and Victims, 27*, 414–433.
- Palarea, R. W., & Langhinrichsen-Rohling, J. (1998). *Unwanted Pursuit Behavior Inventory* (Unpublished measure).
- Sheridan, L. P., Blaauw, E., & Davies, G. M. (2003). Stalking: Knowns and unknowns. *Trauma, Violence, & Abuse, 4*, 148–162.
- 島田 貴仁 (2016). ストーカーキングの被害過程 刑法雑誌, *55*, 459–470.
- 城間 益里・松井 豊・島田 貴仁 (2017). ストーカーキングに関する研究動向と課題 筑波大学心理学研究, *54*, 39–50.
- 上野 淳子・松並 知子・青野 篤子 (2018). 大学生におけるデート DV 被害の男女差——恋人による被支配感と自尊感情に与える影響—— 四天王寺大学紀要, *66*, 91–104.
- Wigman, S. A., Graham-Kevan, N., & Archer, J. (2008). Investigating sub-groups of harassers: The roles of attachment, dependency, jealousy, and aggression. *Journal of Family Violence, 23*, 557–568.
- 2019. 3. 5 受稿, 2019. 9. 21 受理 ——